アンケート調査プロジェクトの試み

―中級前期「話す500」の実践報告―

小林　真紀子　　三木　杏子

要　旨

本稿では、筑波大学留学生センター中級前期「話す」の授業を概観する。このコースの到達目標は、①文化、社会性のあるテーマについて、視聴覚教材を用いて理解を深め、テーマに沿って簡単な日本語でディスカッションできること、②日本語で簡単なアンケート調査ができ、その結果について分析し、発表できることである。前者は広く社会に興味・関心を持つという点で、後者の調査発表のテーマ探しへの動機付けとなった。調査発表の内容を充実させるために段階的に行った指導法について具体的に記述し、学習者の調査発表の成果とともに、アカデミックな場面における日本語運用力を検証する。また調査発表達成後に学習者に行った授業評価をもとに、コース全体を振り返る。

【キーワード】中級前期日本語学習者　日本語運用力　アンケート調査発表
学習者主体

A Japanese Questionnaire Research Project : a report on the intermediate level speaking 500 course

KOBAYASHI Makiko, MIKI Kyoko

【Abstract】This is an overview of the intermediate speaking class at the International Student Center in Tsukuba University. The goals of this course are : 1) to understand cultural and social themes using visual materials and themed discussions conducted in simple Japanese, and 2) to be able to conduct a simple questionnaire research project in Japanese, analyze the data, and report on the results. The first goal seeks to promote wider interest and concern in society, and in doing so, becomes a method for choosing themes which suit the purpose of the second goal. This paper reports on the steps taken to produce desirable learner projects, examines Japanese performance in an academic situation based on learners' project outcomes, and reviews the course in accordance with material provided by learners in course evaluations.

【Keywords】intermediate level Japanese learners, Japanese language performance, questionnaire research project, learner-centered

1．はじめに

筑波大学留学生センター日本語補講コースは、中上級の技能別コースが500から800まで、４レベル開講されている。2013年度の２学期制移行に伴い、授業期間がこれまでの10週10回から15週15回に増えたこともあり、2013年度よりカリキュラム改訂を行ってきた。本稿は2014年１学期の中級前期日本語学習者（以下、「話す500」）を対象とするコースについて報告し、有効な活動を提案するものである。このコースの対象となる学習者は、留学生センターの日本語補講コースの各レベル（100～400）を経て進級してきた学習者と、自国などで日本語学習歴があり、学期開始時のプレースメントテストにより、この500レベルに配置された学習者である。

本稿では、2014年１学期の「話す500」の試みと学習者の調査発表の成果をもとに、アカデミックな場面における日本語運用力を検証し、紹介する。また2014年１学期は大幅なカリキュラム改訂を行った学期であったため、授業修了時に行った学習者への授業評価をもとに、このコースの意義と課題を整理し、今後の授業改善の資料として役立てたい。

2．授業設計の目的と背景

この章では、2014年１学期の大幅なカリキュラム改訂に至った経緯について簡単に述べておく。

2011年度から2012年度の「話す500」レベルは、初級文型の学習が終わり、初級から中級への移行期の学生を対象にしたコースで、留学生センター日本語補講コースの中級初期から前期に位置づけられていた（関崎他、2012）。しかし、2013年度の２学期制移行に伴い「話す500」の前段階として「話す・聞く400」が新設された。このコースは、初級を終えたレベルの文法と語彙は理解しているが、それを運用するレベルに達していない、いわゆる「初級以上、中級未満」の学習者を対象とした中級入門コースである。この「話す・聞く400」の開講により、初級で学んだ日本語の運用力を高め、より意味のまとまりを考えた活動や発表が取り入れられた（小野寺他、2014）。それにより、「話す500」で週ごとにテーマに沿った「発表」と「会話」を交互に組み込み、口頭能力と日常的な会話能力を向上するという現行の授業設計では レベルに物足りなさを感じると判断した。

そこで2013年度は、「話す600」で使用していた『日本語で発信』（杉浦、2012）を参考にし、小グループ発表、質疑応答、討論の練習を行った。教室外で最近気になるニュースについてインタビューをしてくるタスクを与えることにより、日本人と触れ合う機会を設け、広く社会全般についての知識を吸収することを目標にした。そして、教室内では報告、討論をし、学期末のグループ発表のテーマ探しへの動機付けとなるようにした。しかし、2013年度の段階で問題となったのは、学習者のレベル不足と教室外での時間の使い方である。

「話す500」では、前レベルの400で（テーマに沿った）日本語運用力の練習をしてきて

いるものの、ニュースなど情報量の多いものの中から発展性のあるテーマを選び、扱うには（話す以外の技能としても）達していなかった。また日本人にインタビューすることも不慣れな学習者が多かった結果、インタビューをしてこないで、自らニュースリソースを書き写してくる者もいた。そのため、本来の目的である「教室内外で日本語環境に触れ、知識を増やす」ということが達成できないように感じた。

そこでどのように中級前期の「話す500」というレベルを位置づけ、何を教え、どのような授業設計にすれば、学習者自身が知的満足を得られるのか検討しなければならなかった。

コース概要については次章で詳細を述べるが、本章では2014年度に重視した点をまとめておきたい。

①どのようにして教室外でも日本語に触れ合う機会を設けるか。

②学習者自ら、興味に合ったテーマを探し出せるか。

③段階的に指導を行いながら、いかに学習者主体となって、グループプロジェクトをさせるか。

以上３点を重視し、筆者らは2014年度のカリキュラム改訂を行った。

３．「話す500」のコース概要

３．１　コース目標と内容

細川（2007：35）は、「学習者主体」とは、「学習の主体が学習者自身であり、問題を発見し解決するのは、学習者自身以外にないという考え方およびその概念」と定義している。また牛窪（2005：27）は、日本語教育における学習者主体を構築し、「学習者が持つ、思考、意思、価値観等を教室の普遍的な内容とすることで、学習者がそれらを日本語で表現し、経験を新たにする場を教師が提供し、学習者が参加することで達成される」という「日本語－学習者」間の関係をとらえなおすことが学習者主体としている。つまり牛窪によって述べられている「学習者主体」とは、単に「学習者主導型」の授業にすればいいというのではなく、学習者自身がクラスメンバーなどの他者との協働において、思考や表現を創造し、発展させていくことに意義があると理解する。そのような教室環境を作っていくために、教師が何もせず、ただ観察することが本コースの目標とは言えない。教師が果たす役割もまた考えなければならない課題であろう。

本コースでは、学習者がアンケート調査プロジェクトを実施していく過程で、教師がどのように関わっていけば学習者が主体的に「問題を発見し解決」しながら「自己実現」していくことができるかを検討し、到達目標を大きく２つに分け、以下のように定めた。

① 前半（１回目～７回目）：文化、社会性のあるテーマについて、視聴覚教材を用いて理解を深め、テーマに沿って簡単な日本語でディスカッションする

② 後半（８回目～15回目）：日本語で簡単なアンケート調査ができ、その結果について分析し、グループ発表する

これにより、前半は教師主導の授業から始まるが、後半は学習者主体となり、いかに個々の学習者が他者との協働において思考力や表現力を養っていけるかを検討し、【表１】に示すような授業設計をした。

【表１】「J500話す」の授業内容

回	内容	次週までの宿題
1	1. オリエンテーション 2. 自己紹介（映像：日本へ来た理由は？） 3. 語彙シートの説明	・語彙ワークシート ・私の国の一番について
2	1. 新しく出会った語彙（スピーチ） 2.『私の国の一番について』グループワーク 3. ディスカッションの仕方	・語彙ワークシート
3	1. 新しく出会った語彙（スピーチ） 2. ディスカッション（文化①） 映像『“おもてなし”について』	・語彙ワークシート
4	1. 新しく出会った語彙（スピーチ） 2. ディスカッション（文化②） 映像『あいまいな日本のマナー』	・語彙ワークシート
5	1. 新しく出会った語彙（スピーチ） 2. ディスカッション（社会問題①） 映像『若者が抱える問題』	・語彙ワークシート
6	1. 新しく出会った語彙（スピーチ） 2. ディスカッション（社会問題②） 映像『中高年の引きこもり』	・自分が興味あるテーマについての発表用メモ
7	ミニ発表：「自分が興味あるテーマについて」 Step1 質疑応答 Step2 ディスカッション	・最終発表で詳しく発表したいテーマを決める
8	アンケート調査と発表について① 1. インタビューとアンケートの練習 2. テーマ決定	・テーマに関するアンケートの質問項目作成
9	アンケート調査と発表について② 1. アンケートシートの作成（グループ） 2. アンケートの仕方について	・アンケートシートをまとめる
10	アンケート調査と発表について③ ビジターセッション：アンケート実施	・教室外の人にインタビュー ・結果について集計
11	アンケート調査と発表について④ 1. グラフや図の読み方、説明の仕方 2. アンケート調査のまとめ	・図やグラフの作成
12	アンケート調査と発表について⑤ 1. アウトライン作成、発表の仕方 2. 発表準備、練習	・グループ発表のレジュメ ・グループ発表の準備
13-15	グループ発表と質疑応答1～3 まとめ、振り返り	同上

コース前半（1回目から7回目）では、まず、意見の言い方、反論の仕方などディスカッションの方法を学んだ。その後、3回目から6回目は、筆者らが視聴覚教材（ニュース番組やテレビ番組）の中から文化的な内容（3，4回目）と社会で問題になっているテーマ（5，6回目）を選んだ。そのテーマについて自分の考えをまとめ、簡単な日本語で話すこと、また相手の意見もよく聞き、それについて自分の立場（賛成か反対か）をはっきりさせること、さらに、授業の最後にグループの意見をまとめてクラスで報告する活動を行った。7回目で、これまで色々なテーマでディスカッションしてきた総まとめとして、学習者自身が興味あるテーマを選んできて、ディスカッションした。前半の視聴覚教材に基づくディスカッションがいい刺激となり、発展性のあるテーマを選ぶ割合が高かったように見受けられ、後半のアンケート調査発表のテーマ探しへのいいきっかけとなったと考える。

コース後半（8回目から15回目）では、『トピックによる日本語総合演習－テーマ探しから発表へ－』（佐々木他、2009）を参考にし、毎時間アンケート調査発表への手引きとして必要な活動の流れや表現を5回（8回目から12回目）に分けて行った。

さらに授業始めに継続して行う語彙ワークシートの1分スピーチやゲストセッションなども盛り込み、語彙力、日本語運用能力を十分伸ばせるよう試みた。

3.2　発表活動の方法

ここでは、3.1のコース後半のアンケート調査発表（8回目から12回目）の主な活動の流れについて詳しく述べる。

アンケート調査 ① インタビューとアンケートの練習：ここでは、インタビューをする手順、よく使われる表現、あいづちなどを導入し、学習者はグループで簡単なアンケートの例に沿って、インタビューの練習をした。また、その結果についてまとめて報告する練習も行った。インタビューした結果をどのようにまとめ、その結果からわかったことやグループの意見をまとめて話すことで、単なる会話で終わらないように学習者にも意識させた。

また宿題で準備してきた興味があるテーマを一人ずつ発表し、最終発表で発表するテーマとグループメンバー（3～4人）を決定した。

アンケート調査 ② アンケートシートの作成：アンケートシートの例を見せ、適切な質問項目の作成ポイントや答えの種類などを指導した。そして、グループでそれぞれが宿題で作成してきた質問項目を擦り合わせ、アンケートシートの作成を試みた。ここでの教師の役割は、質問の意図がわかりにくいもの、質問結果をまとめるのが困難なものについて指導することであった。次週までの宿題として、パソコン入力し、アンケートシートを完成させ、期日までに教師にメールで送るようにした。

アンケート調査 ③ ビジターセッション：アンケート調査は、クラスに日本人のゲストを招く形で行われた。各グループ20人分のアンケートシートを準備した。日本人ゲストは学習者の研究室の友だちや部活動の仲間などに声かけをしてもらい、授業時間に来てもらった。学習者は、日本に住みながらも、研究室の日本人やチューターは忙しくてあまり接する機会がないと言う学習者も多く、いい経験になったと思われる。日本人に質問する人、メモを取る人など、事前に決まりを設けなかったが、自然な会話の中で互いに協力してインタビューしており、いい学習になった。ただし、今回授業に来たゲストが全員筑波大学生だったため、年齢による差異や留学生との比較などを知りたいアンケートには不向きだったかと思われる。そのため、次週までの宿題は、さらに教室外でもアンケートを取り、各グループ20名程度のひとに聞き、集計してくるようにした。

アンケート調査 ④ グラフや図の説明：まず、学習者にアンケートの結果を集計し、あとで分析しやすいように図表にまとめるということを説明した。そして、いくつかのグラフや図を用意し、学習者同士ペアになって説明する練習をし、そこから何がわかるかを話し合った。さらに、グラフの説明の流れやグラフの読み方で必要な表現を学んだ。

授業後半は、グループで集計結果からどのようなことがわかったか話し合いの時間を設けた。どんな結果が出たか、どのように分析するか、それに対するグループの意見、このアンケートからどのようなことがわかったかなど話し合ってもらった。宿題は視覚資料を作成すること、簡単にグループの考察をまとめることとした。

アンケート調査 ⑤ 発表の準備、アウトライン作成：最終発表に向けての準備を進めていった。発表のための資料（日付、メンバー、テーマ、目的、調査方法、調査対象、質問、グラフを用いた調査結果、考察、結論、参考文献を明記）とグループごとに評価表を作成して配ることにした。アウトラインを作成することで、誰がどのパートを話すのか役割分担を明確にし、視覚資料を入れることにより、聞き手の理解を助ける働きとなった。

4．アンケート調査プロジェクトの授業実践の分析

2014年度に重視した点をクリアにするために、毎回活動の流れに沿って、学習者がグループの中で一つのテーマについて調査プロジェクトを協働していくこと、またインタビューを通して他者と接する機会を持つことで、日本語運用力だけでなく、文化や考え方の違いなどを他者と共有、理解することに本活動の意義があると筆者らは考える。その反面、様々なバックグラウンドを持つ学習者が主体となり「問題を発見し解決」しながら「自己実現」していくために、活動のすべてを学習者に委ねることに限界を感じた。そこで、いくつかの段階で学習者への意識化を徹底させると効率よく最終発表まで導いていけるのではないかということが、学期を終えて見えてきた。本章では、学習者のアンケート調査プロジェ

クトをもとに、効果があった点、反対に問題点などを整理し、教師がよりよい教室作りを維持・促進するために、どのように学習者と関わっていけば、より内容のあるプロジェクトになるのかを３つの段階に分けて述べたい。

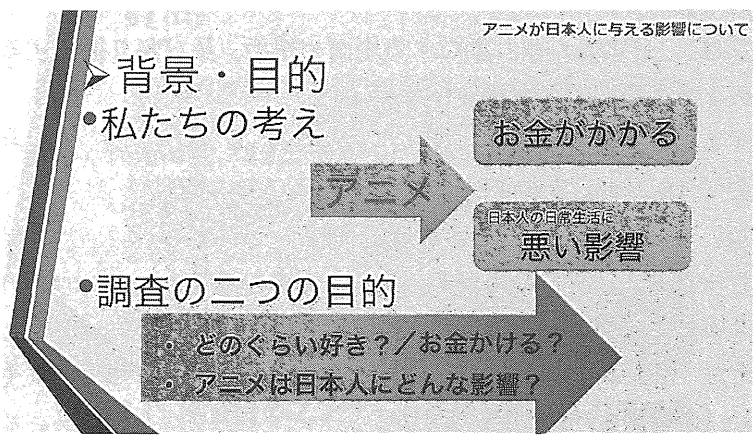
4.1　テーマ決定の段階

テーマ決定の際、学習者には今まで視聴覚教材などで得た情報をもとに、宿題で考えてきたテーマを、一人ずつクラスで発表してもらい、教師が板書し、「このテーマについて、アンケートを作るときにどのような質問が考えられるか」などクラスで話し合いながらテーマを決めていった。この話し合いでは学習者がテーマを選んだ動機などを簡単に話す場面も見られたが、そのテーマについて「何を」理解したいのか、「何を」調査したいのかという具体性に欠けていた。教師はこのテーマ決定の段階で学習者にテーマを自分の問題として捉える教室作りをすることで、学習者の主体性が生まれるのではないかと考える。以下は、各クラスのアンケート調査発表のグループテーマの一例である。2014年１学期は２クラス開講された。

【J520-1】「スマートフォンの使用について」、「日本人の海外渡航観について」、「就職への意識調査」、「割り勘について」

【J520-2】「ペットは家族の一員か」、「いじめの問題について」、「曖昧な日本の文化について」、「アニメが日本人に与える影響について」

上記の「アニメが日本人に与える影響について」を選んだグループは、最初の問題提起が明確であったため、【図１】のようにグループの考えや調査に対する目的がはっきりと示され、その後のアンケート質問項目の作成がスムーズに行われていた。



【図１】 学習者のアンケート調査の背景や目的の例

一方で「スマートフォンの使用について」を選んだグループは、テーマ選択当初は小学生などの年少者のスマートフォンの使用に興味があったものの、実際にインタビューを行うのは大学生ということで質問内容の変更をしなければならなくなり、質問項目の作成時に苦労をした。また「ペットは家族の一員か」を選んだグループは、「ペットにおしゃれをさせる日本人が多い」という理由から、日本人や留学生に対する意識調査を行うこととなったが、この調査で何を理解したいのか、何を再確認したいのかという目的を見出せずに調査を進めていった結果、このグループはアンケート結果分析の段階で何も分析できる結果を聞いていないことに気づいた。そこで国や性別によって違いがあるのかなど、授業外でのインタビュー調査を再度行うこととなった。

4.2　アンケート質問項目作成の段階

次に、アンケートの質問項目作成の段階である。グループでの話し合いのとき、そのテーマについて、学習者自身がどのように考えるか（背景）、調査の目的を明確にし、どのような結果になるか、予測を立てながら一貫性のある質問項目を考えるよう指導する必要がある（佐々木、2009）。教師はあくまでグループの活動が問題なく行われているかを見て回り、学生からの質問やサポートが必要な場合のみ、活動に加わった。この「話す500」というレベルでは、調査の分析はまだ難しいことかもしれないが、単にアンケート結果の報告で終わらせないために、あとの分析のことも考慮に入れてアンケートを作っていく必要がある。これは、4.1のテーマ決定の段階と同じで、何を知るためにアンケートを行うかが明確であり、その活動がどれだけ必然性のあるものかが学習者に伝われば、主体的な活動ができ、いい質問項目が作れるのではないかと考える。以下、２つのグループのテーマ例に絞って述べていきたい。

【割り勘について】

このグループは、「日本人が割り勘をする場面や相手、及び割り勘をする理由」を聞くために、以下のように質問項目を設定した。

１．割り勘をすることがありますか。（はい　いいえ）
２．どんな場合に（だれと）しますか。（友達　恋人　その他）
３．割り勘についてどう思いますか。（賛成・反対）
４．割り勘をしたとき、よくない事があったことがありますか。（あった　ない）
５．デートをするとき、誰が払いますか。（男性　女性　割り勘）
６．あなたの方が（相手より）給料が高い場合は、デート代を払いますか。（する　しない）
７．どのぐらい（の金額を）ご馳走しますか。
　（1000円以下　　1000～5000円　　5000～10000円　　10000円以上）

8．（誰かと食事をする際、）割り勘とご馳走（をする）以外の払う方法はありますか。
（自由記述）

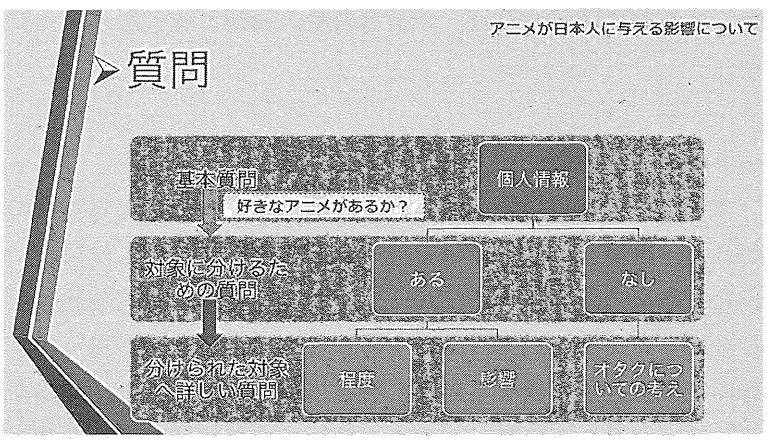
また、質問紙上では、基本情報として性別を記入する欄を設けた。これは、インタビュー結果をまとめる際、男女で違いがあるかどうか比較するためであった。しかし、実際にはインタビュー時に何名か分の性別を記入するのを忘れてしまったため、男女の比較が今回はできなかった。

上記の質問項目を見ると、「割り勘」について実体験や意見を引き出そうとする質問項目が多く出されている。また、質問項目の5「デートをするときの支払い」については、恋人がいない場合はいることを想定して答えてもらった。

学習者同士で考えていた際には、質問項目の1～4までは学習者自身が考えて提示した。しかし、5や6は学習者自身では考え付かなかった様子である。学習者に聞いてみたところ、自分の国ではデートの際には男性が支払う場合が多く、またそれが当然であるという考えはあったものの、それと日本での感覚の違いがはっきり出る質問はなかなか考え付かなかった様子である。そこで、教師からさまざまな場面を想定してみてはどうかと提案をした。その結果、「デート」に的を絞った質問や、女性のほうが給料が多い場合などを想定した質問を盛り込むことにした。

【アニメが日本人に与える影響】

このグループは【図2】のような質問項目の流れ（基本的な質問、対象に分けるための質問、分けられた対象への詳しい質問）を構想し、以下のような質問項目を作成した。



【図2】 学習者のアンケート調査質問項目の構想例

1．好きなアニメがありますか。（ある　ない）
2．自分の趣味が（他人に）わかってしまうことが気になりますか。（気になる　気にならない）
3．いつからアニメが好きになったか？（1年以内　1-5年　5年-10年　10年以上）
4．アニメのためにどのくらいお金をかけますか？（一ヶ月）（1万以下　1?5万　5万以上）
5．趣味に使うお金は誰が払いますか。（自分　両親　その他）
6．日常生活にいい影響はありますか。（新しい友達ができる　仕事／学習に役に立つことを学んだ　性格がよくなる　その他）
7．それに対して、悪い影響はありますか。（お金を使いすぎる　現実の人間関係の問題　仕事／勉強をやめる　その他）
8．周りの人の中でアニメオタクがいますか。（いる　いない　気にしていない）
9．そのような人をどう思いますか。（他人に迷惑をかける　いい趣味だ　気にしていない）

まず、質問項目1で好きなアニメがあるか、ないかで対象を分け、「ある」と解答した人たちへは、好きな度合い（質問項目2から5）やアニメが与えた影響（質問項目6と7）について詳しく聞いている。このグループ全員がアニメに興味がある学習者であったため、当初の話し合いでは「好きなアニメがある」「自分たちはアニメによって日本に興味を持ったので、きっといい影響があるに違いない」という前提で質問項目を作っていた。そこで教師から「ない」と回答した人たちのことも考慮した質問も入れてはどうかと提案した。その後、質問項目1で対象を分ける質問を入れ、質問項目8と9で、「ない」と回答した人たちにも一般的に言われているアニメオタクを社会現象の一つと捉えて詳しく聞くことにした。結果、一貫性のある質問項目を作成することができたが、質問項目の構想図などをグループ活動に入る前に提示すれば、学習者自身、質問の流れをイメージしやすいのではないだろうか。

4．3　アンケートの考察の段階

最後は、アンケートの考察の段階である。今学期は各グループとも考察にかなりの時間を割いたと思われる。学習者は調査結果を見て、どの部分について注目し、どうしてこのような結果が出たと考えるか、そしてグループの中で導き出された結論は何であるかを相互にやりとりしながら考える。いくつかのグループは「自分たちが思っていた結果と全く違う」という理由で調査結果と異なる結果に持っていこうとしたり、結論が単なる想像や感想で終わってしまったりしていた。もともと抱いていた意識や視点が調査結果によってどのように変化したか、そのプロセスを意識化して日本語で表現することも大切であると考える。また、グラフや図の説明導入の際に、グラフから読み取れること、予測できるこ

となど考察の仕方や展開の仕方の指導を組み込む必要があると考えた。以下、学習者の考察結果を見ていきたい。

【曖昧な日本の文化について】

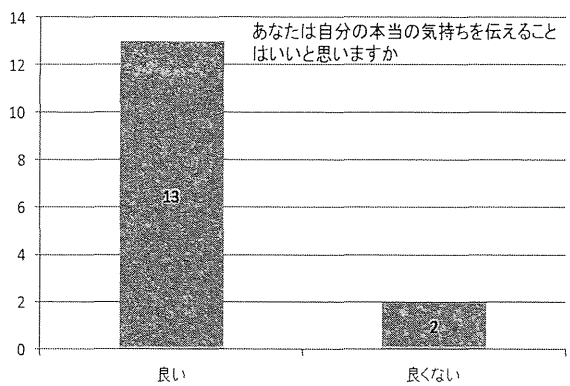
このグループは、「どうして日本人は本当の自分を出さないのか」という疑問から「留学生が日本へ来て抱いた様々な日本人のイメージ」について活動を進めていった。序盤から「日本人は、こういう状況のときこうする、こういう場面でこう言う」といった意見は多く出たが、何を調査したいのか調査の主旨が散漫としていた。そこで教師から「曖昧な日本の文化」とは具体的にどういうことなのか、まずその説明を聞き手にもわかりやすく伝えるように助言した。学習者は「曖昧な日本の文化」とは何かを調べていく過程で、「地理環境」、「日本の集団主義」そして「日本人の距離感」などのキーワードが出、「日本人が曖昧な文化についてどう思っていて、それは社会で生活するために本当に大事なことなのか知るため」に調査を進めた。

最終的に調査結果の

1．（日本人は）周りの人に本当の自分を出しますか。

2．自分の本当の気持ちを（相手に）伝えることはいいことだと思いますか。

の2点について取り上げ、分析していた。特に2つ目の結果について、興味深い分析をしていた。



筑波大学の日本人学生は本当の自分の気持ちを伝えることはいいと思うのに対して、二人のお年寄りはよくないと思うことが分かった。

【図3】 学習者の分析結果の一例

【図3】は学習者の分析結果である。2名のみ大学生以外の協力を得たとのことで、調査としては人数に偏りが見られるが、学生との違いは何であると思うかという教師の問いかけに、インターネットの影響、グローバル化の影響という2つのグループの考えを導き出した。『大学生は留学した人も多く、また留学生と触れ合う機会を通して「自分の意見

をはっきり伝える文化」に影響されてきている。それに対して、お年寄りは「内と外」という日本の伝統的な文化に深く影響されてきているのではないか』と結論づけた。

このグループは、当初の疑問であった「どうして日本人は本当の自分を出さないのか」について、自分たちが考えていたより若者は曖昧な態度をしていないという結果が出たことで、発表準備が進まなかった。しかし、考えていた結果と違っていても、結果をもとに様々な側面から話し合いができたと思われる。

【アニメが日本人に与える影響】

このグループはアジア人を中心に構成されたグループで、学習者自身がアニメの影響で日本に興味を持ち、それがきっかけで留学を考えたと答えたグループであったため、留学生にとってアニメはいい影響だと捉えていたが、逆に日本には「アニメオタクが多く存在する」、そのため「日本人にとってアニメは日常生活に悪い影響を与えているはずだ」という考えから、調査を進めていった。このグループも予想と相反する結果であったようで、考察で苦戦し、話し合いが進まなかったグループである。そこで、教師が限られた時間と人数で調査しなければならないことを伝え、どのように意識が変容したかを報告するよう提案した。

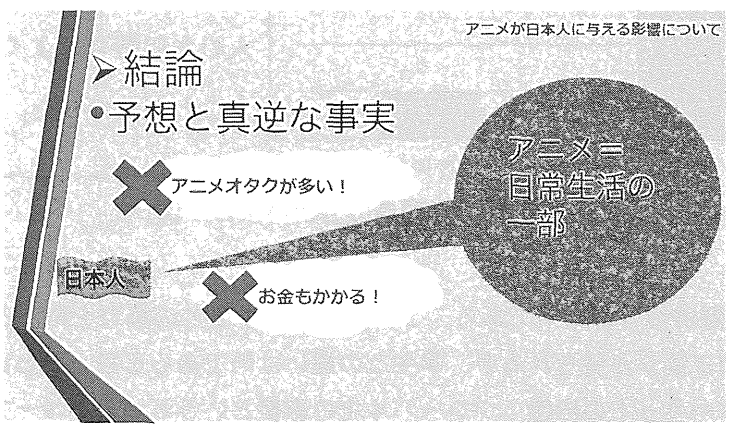
グループで導き出された分析結果として、次のように分けて説明していた。

1．アニメのためにお金をかけるのは、留学生だけかもしれない。

2．日本人はオタクに対する偏見がなく、「別に恥ずかしい趣味ではない」と思っている。

上記の2つの点について、他国のアニメ市場と比べたり、オタクに関するニュースを紹介したり、根拠に基づいて学習者自身の意見を述べようとしていた。

最終的には、【図4】に挙げられたように、まとめることができた。日本人にとってアニメは生活の一部になっているので、「そんなに生活に大きな影響を与えていると考えてい



【図4】　学習者の分析結果の一例

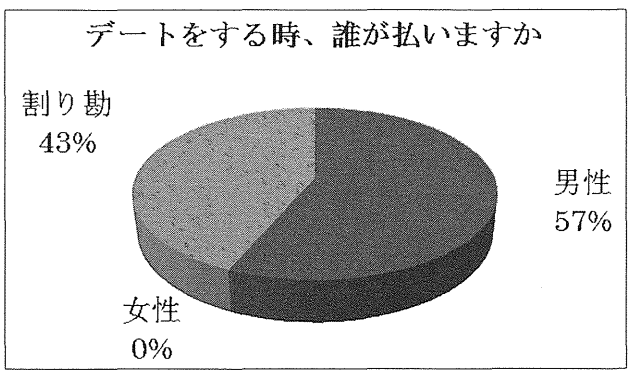
ないのかもしれない」。そして、「外国人の自分たちがアニメやオタク現象を大げさなことにしない方がいいのではないか」と結論づけていた。グループ間で相互に議論する中で、アニメ文化について「わかりたい」という思いが、必然的に主体性を発揮する環境になっていた。

【割り勘について】

このグループは、「日本では割り勘をする場面が多く、恋人同士でも割り勘をしているようだが、自分の国ではデートでは男性がデート代を支払う」という違いから、割り勘について日本人はどのように感じているのか知りたい、という意見が出、日本人を対象に、割り勘についての意識調査を行った。学習者の間では、「デートの際は男性が支払いをするものだ」という考えが多数派であったため、その意見を押し付けるのではなく、割り勘をする人たちはどのように考えてそうしているのかを意識してインタビューと考察をするよう助言した。

結果、質問の3で、「割り勘について賛成か反対か」を聞いた際、その理由を詳しく聞くことができていた。理由として挙げられたのは、①「お金がない」ため、相手の分まで支払うことが負担だと感じること、②「自分の分は自分で支払うのが公平である」という考え、また、③「お金のことを気にしないままで楽に付き合える関係であるため」に割り勘をしていることなどであった。

また、質問5のデート時の支払いは誰がするか、という質問では、男性57％、女性0％、割り勘43％という結果が出た。この点については、男性が実際に支払っている（支払うだろうと考えている）ひとが半数以上いる点から、日本人は女性がデート代をすべて支払うという考えはなく、男性が全額を支払うべきだという考えがあると考察した。しかし一方で、43％のひとは割り勘をするという点について、具体的な理由を聞き、特に学生にとってデート代をすべて負担するのは金銭的に苦しく、女性の中にも相手に負担をかけたくないと考えている人がいることを指摘した。



【図5】 学習者の分析の一例

一方で、質問項目を作る段階では、被調査者のデータとして性別を聞き、最終的に比較をするということを目標としていたが、宿題としてインタビューをする際にはその部分を記入しておくことを忘れてしまった学習者がいたため、考察の段階では男女間の比較ができなかったことが悔やまれる。しかし、最終発表時には、調査の結果と自分たち留学生の感覚とを比較することができ、活発な議論ができた。

5．コース評価とまとめ

本章では、コース最終日に実施したアンケートの結果をもとに、2014年1学期の「話す500」のコースについての学習者の満足度と効果について検討したい。

5．1　アンケート内容と回答者数

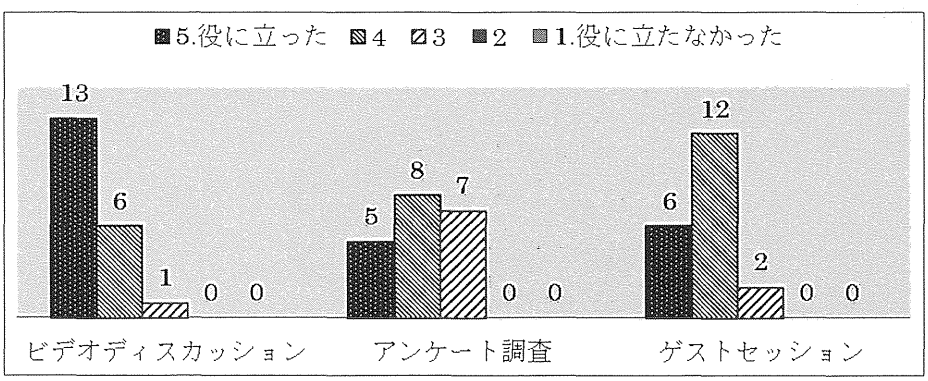
アンケートの形式は選択肢から選ぶ質問と自由記述を併用し、1）「映像を見てディスカッションする」について、2）「アンケート調査発表」について、3）クラス全体について、3つの項目に分けて詳しく質問していった。

J520-1クラスでは受講生18名中参加者11名が、J520-2クラスでは14名中9名、合計20名が回答した。以下でその集計結果をまとめる。なお、特別記述がない限り有効回答数は20である。それより多い場合は、学習者が複数回答を選んだ場合であり、少ないものについては回答がない学習者がいた質問であった。

5．2　コース全体の評価結果

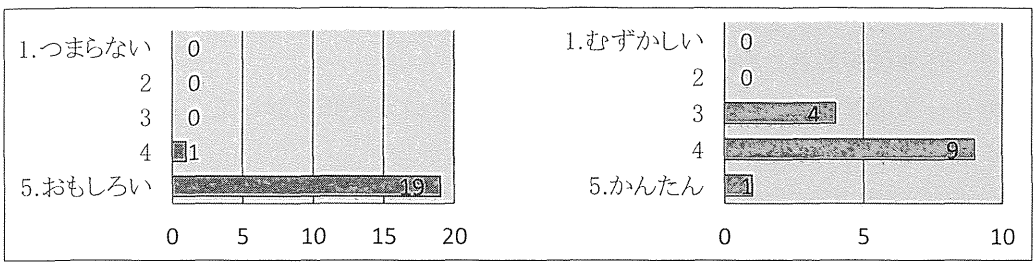
5．2．1　授業の満足度（役に立った・楽しかった授業について）

コースの内容について、「映像を見てディスカッションする」「アンケート調査」「ゲストセッション」の3つの質問で、それらの活動が役に立ったと感じているかどうかを比較した。



【図6】　授業の満足度

いずれの活動についても、「役に立たなかった」と感じている学習者はおらず、活動は有益だったと感じていたようである。その中でも、「映像を見てディスカッションする」活動では、20名中19名が４，５を選択しており、ほぼ全員が役に立ったと感じている。

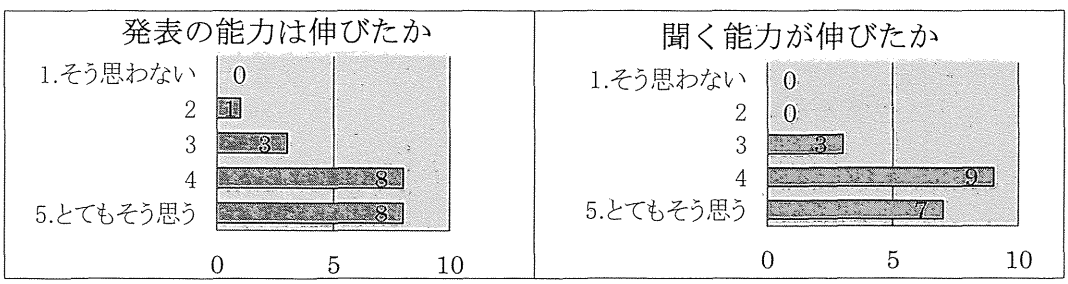


【図７】 ビデオ内容の評価

ビデオの内容についても【図７】が示すように、全員が「おもしろい」と回答しており、内容は学習者が興味を持てるものだったと考えられる。また、その内容については簡単だと感じている学習者も多いこともわかり、内容が難しすぎて理解できなかった、ということはなかったようである。このことから、コース前半の授業（１回～７回）は、学習者のレベルにあった内容で、学習者の知識を刺激することができていたのではないかと考えられる。

一方で、図６の「アンケート調査」については「どちらでもない」が７名いた。この「アンケート調査」については、映像を見て意見を言い合うものより、自分たちで準備をしなければならないものが多く、またその質問やアンケートの結果によっては中級前期の学習者には内容的に難しい、または深く考察することができないものもあったため、このような結果になったのではないかと考えられる。

「ゲストセッション」について、18名の学習者はゲストセッションが「役に立った」と感じており、有意義なものだったと感じていることがわかる。またこのセッションでは、インタビューを通して本授業により「話す」能力だけではなく「聞く」能力も伸びたと答えた学習者も多かった。

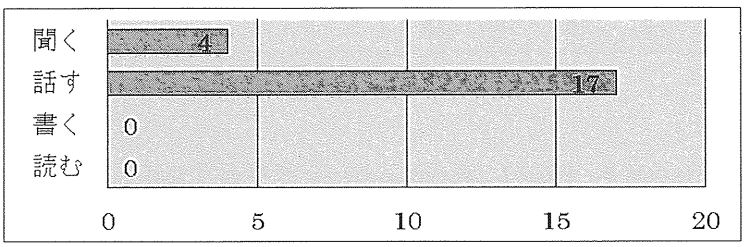


【図８】 発表の能力の評価とインタビューによる聞く力の評価　＊有効回答数19

インタビュー調査はゲストセッションと宿題という形で行われたが、その特性から20名前後にインタビューを行う必要があった。そのため、学習者はひとり3，4人の人に宿題でインタビューをする必要があったが、今回は宿題もよくやってきた様子であった。結果として、聞く能力の向上を学生自身が感じることとなったと考えられる。

5.2.2　日本語運用力について

このコースを終えてどんな能力が一番伸びたかという質問に対して、【図9】のような結果になった。



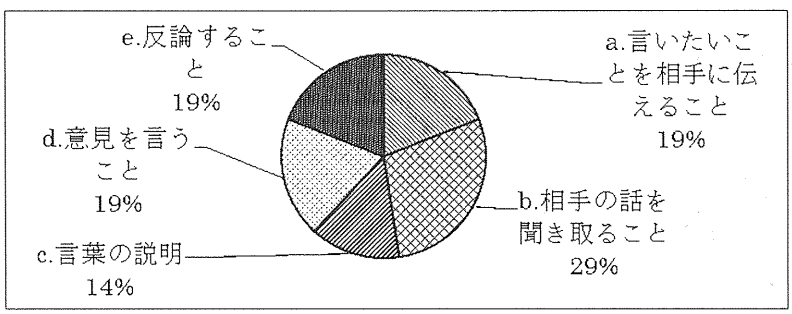
【図9】　一番伸びたと思う能力　＊有効回答数21

ここでも学習者が一番伸びたと思う能力は「話す」のほかに「聞く」が挙げられた。今回の「話す」の授業では、「話す」活動以外にも実際には資料を読んだり、レジュメを書いたり、相手の意見を聞くなど複合的な活動が行われていたが、学生はとくに「話す」と「聞く」能力が伸びたと感じていたことがわかった。

5.3　それぞれの活動内容についての評価結果

以下でコース前半の「映像を見てディスカッションする」、コース後半の「アンケート調査発表」について詳しく見ていく。

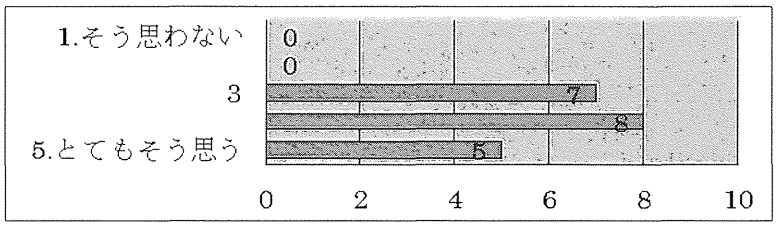
5.3.1「映像を見てディスカッションする」について



【図10】　ディスカッションで難しかったこと　＊有効回答数21

「映像を見てグループディスカッションする」で難しかったことについては、「b.相手の話を聞き取ること」を選んだのが6名で、全体の29%を占め、最も多くなった。その他は「a.言いたいことを相手に伝えること」「d.意見を言うこと」「e.反論すること」がそれぞれ4名で19%であり、「c.言葉の説明」が3名で14%であった。以上から、相手の言いたいことを理解することが一番難しいと感じていることがわかる。

「話す500」レベルでは、相手の発話が予測できない部分もあり、また互いに文法の正確さにも問題を抱えているため、このような結果になったのではないかと考えられる。このような学生が抱えている困難点も意識しつつ授業を組み立てる必要がある。

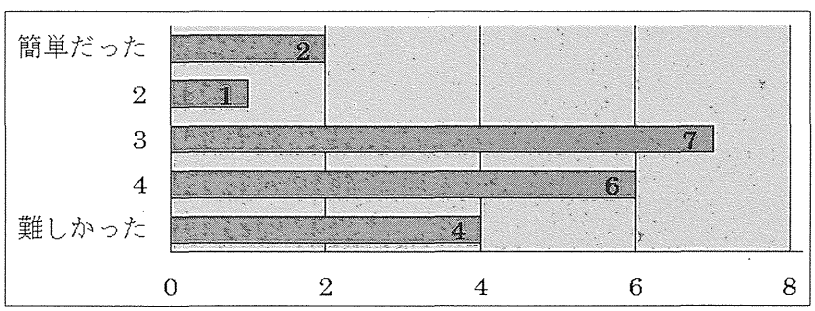


【図11】 ディスカッションはテーマ選びのヒントになったか

次に、【図11】の「映像を見てディスカッションする」はコース後半のアンケート調査のテーマを選ぶヒントになったかという質問に対して、4と5の「そう思う」を選んだのが13名であった。授業開始時からアンケート調査に意識を向けていた学習者にとっては、ヒントとなったのではないかと考えられる。一方で、「どちらでもない」にあたる3を選択した学習者も7名いることから、授業序盤からの意識づけをより一層していく必要があると考える。

5.3.2 「アンケート調査発表」について

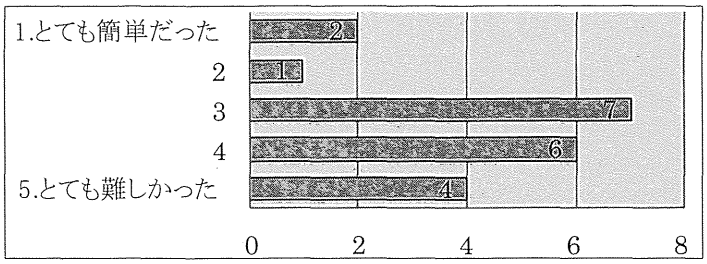
アンケート調査については、「アンケート作成」「アンケートの考察」について聞いた。



【図12】 アンケートシート作成の評価

まず、アンケートの作成については、全体の55％にあたる11名が「難しかった」と答えている。一方で、20％にあたる４名は「難しくなかった」と感じており、学習者によってその感じ方に差が見られた。アンケートの内容によっては質問が作りにくいものがあったことからこのような結果になったと考えられる。

次に、アンケート集計後の考察ついて聞いたところ、以下のような結果となった。



【図13】 アンケート結果の考察の評価

半数の学習者は４，５を選択しており、「難しかった」と感じている。一方で、３名は「とても簡単だった」「簡単だった」と感じており、ここでも学習者間の感じ方の差があることがわかった。

最後に、最終目標であるアンケート調査発表をしてみてどうだったかを聞いた。

【表２】 学習者のアンケート調査についてのコメント

面白かった
おもしろかったです
とてもよかったと思います。聞くことと話すことが進歩になりましたと思います。
日本語ならではむずかしい
相手が言いたいことが分かった
いそがしい時期にちょっと大変でしたが、おもしろかったと思います。
新しい調査方法が勉強できました
勉強になりました
いろいろ勉強しました
面白かったです
むずかしかったです。アンケートの準備をした時どうなことの調査をしたいのがむずかしかったです。
いいけいけんと思います。

「おもしろかった」「勉強になった」という意見が多かった。具体的には、「新しい調査方法を勉強できた」「聞くことと話すことが進歩した」「相手の言いたいことがわかった」という意見があった。一方で、「忙しい時期はちょっと大変だった」などのように、その課題の内容について負担を感じている学習者がいたこともわかった。

今回は最終発表に向けたアンケート作成や実際の調査、考察などに時間を割いたため、実際の発表をする機会が減ってしまったと感じている。アンケートの準備でも学習者同士で話し合う場面は多々あるが、毎回の時間の報告についてグループごとに発表する時間もきちんと確保していく必要があるだろう。

5.4 まとめ

全体を通して、学習者の調査発表や授業評価アンケートの結果を中心に見ていくと、教師主導の学習よりクラスメートとのやりとり、ゲストセッションやグループの話し合いなどクラスに主体的に参加する経験は、学習者自身が問題意識を共有し、それを他者との協働作業の中で解決していくことができたのではないだろうか。そして日本語運用能力を高めながら一つの活動を行い、自己実現していくことができるようになったと推測でき、先行の研究を裏付ける結果となったのではないかと考える。2014年1学期は、学習者が自律的に活動に取り組めるように、またコース前半と後半に分けてつながりを持たせるように授業設計したことで、より有意義な活動になったと思われる。

その反面、学習者の調査発表の成果をもとに分析・考察することで、学習者主体とは言え、教師側も段階的にどのようにサポートしたら、よりよい授業・発表となるのかという教師側の役割についての問題点も見えてきた。今後は、グループ活動での相談や発話だけではなく、クラスで報告し合い、発表する機会も設けたい。また日本人の学生だけでなく、学生以外の社会人や地域住民とも関わる機会を持つことで、調査の幅を広げ、学習者がさまざまな観点から分析を行えるような授業改善を行っていきたい。

注

4.2で紹介した学習者のアンケートでの質問項目については、適宜文法の誤りなどを修正している。

参考文献

牛窪隆太（2005）「日本語教育における学習者主体―日本語話者としての主体性に注目して」『リテラシーズ1―ことば・文化・社会の言語教育へ』リテラシーズ研究会（編）くろしお出版：87-94

小野寺志津・木戸光子・田中孝始・中山健一（2015）「意味のまとまりを考えた中級入門

クラス―初級から中級への縦のアーティキュレーションを考えたコース運営の試み―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』30号：181-199

佐々木薫・安藤節子・草野宗子・田口典子・赤木浩文（2009）『トピックによる日本語総合演習―テーマ探しから発表へ―中級前期』スリーエーネットワーク

杉浦千里（2012）「中級学習者の話す力を伸ばす授業設計および教材開発―「話す600, 700」の実践報告―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号：229-246

関崎博紀・小林真紀子・ボイクマン総子・杉浦千里・長戸三成子・堀恵子・ブッシュネルケード（2012）「筑波大学留学生センター日本語教育スタンダード「話す」の構築に向けて」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号：247-270

細川英雄（2007）「第２章 日本語教育における『学習者主体』と『文化リテラシー』形成の意味」『変貌する言語教育』佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄外編 くろしお出版：27-46